

Eureka XII

六年制通信 No.8 令和6年5月24日(金)号

マタイ効果

お金というのはたくさん持っている人のところに集まり、ほとんど持っていない人から出ていこうとする。これがマタイ効果と呼ばれるものです。富める者はさらに富む、ということですね。マタイは新約聖書の「マタイによる福音書」の著者で、英語圏では Matthew (マシュー) として今も残っています。男性名ですな。この福音書の 25 章 29 節にこうあります。文語訳を読みやすく書いてみると「すべて持てる人は、与えられていよいよ豊かになる。しかし持たない人は、(わずかに) 持っているものをも取られる」です。これがマタイ効果の出典なのですが、この前に短い物語が添えられています。要約して紹介しましょう。「旅に出る主人が三人の使用人にそれぞれお金を預けます。一人目には 5 タラント、二人目には 2 タラント、三人目には 1 タラントです。何年かのちに主人が帰ってくると、使用人に預けていたお金を確認します。一人目は 10 タラントに増やし、二人目は 4 タラントに増やしていました。三人目は 1 タラントを土に埋めて保管していたので 1 タラントのままでした。主人はお金を倍に増やした二人の使用人を平等にほめたたえ、1 タラントに手をつけず土の中で保管していた使用人に対しては腹を立て、その 1 タラントを取り上げ 10 タラントに増やした使用人に与えました (注: タラントは古代ギリシアの通貨の単位)」、こんな話です。どうやってお金を増やしたかは「これをはたらかせて」としか書いてありませんからわかりませんが、10 タラントを持つものは 11 タラントに、1 タラントしか持たないものは一文無しになったわけですね。この、プラスがさらなるプラスを呼び込むという現象は、何もお金に限定した話ではないと思います。現実を観察すると様々な場面で納得できることが多いように思います。私たちは学習の場でもスポーツにおいても、できる人がどんどんできるようになっていくのを目にしています。

教育面では、例えば読み書きの能力が早い段階で修得できると、その能力はどんどん伸びていくことなどを指してマタイ効果と言いますね。中高の学校教育の目的は畢竟「社会に出たのち、生徒諸君が読んだり聞いたり話したり書いたりを何不自由なくできるようになること」だと私は考えているのですが、これ、簡単そうに見えて実は意外に難しいのですよ。なぜなら何不自由なく読む、聞く、話す、書くことができるということはそれぞれ「内容を把握できるように正しく読む」、「正確に聞いて理解する」、「相手が誤解しないように、不愉快にならないように、その場にふさわしい言葉を使って話す」、「必要十分な表現で簡潔に、しかも真意が正しく伝わるように書く」ことができるということですから。さらに、読むや聞くには数字も含まれます。計算

がわかっていないと正しく読んだり聞いたりできません。また、読んだことや聞いたことを要約して伝えることもできなくてはなりません。ね、結構難しいでしょ。

さて、このタラントですが原語をローマ字にすると **talanton** で、この語を語源とする英単語があるのですが、思いつきますか。そう、**talent** つまり「才能」です。語源辞典によると、通貨の単位がこの意味になったのはまさに「マタイによる福音書」の喩え話に由来する比喩的用法から、とのこと。ということは、この物語をそれぞれ 5 の才能 2 の才能 1 の才能を持った人と読み替えても面白いかもね。与えられた才能は正しく行使しなければならないという教訓に読めますから。そして、その才能も上手に使えばさらに伸びていくということです。5 の才能と 2 の才能に優劣をつけていないのもいいですね。持てる力を発揮すればいいということですから。

今週のおすすめ

・白井のり子 『典子 44 歳 いま、伝えたい』 (光文社)

サブタイトルが～「典子は、今」あれから 25 年～です。もっと若い時に観たと思っていましたが、「典子は、今」というドキュメンタリー映画の作成は 1981 年とのこと。だったら私、成人していますからテレビで観たのかなあ。私より若い世代の人はおそらく学校の体育館で観たのではないかと思います。相当数の小中高生が当時この映画を観たはず。君たちは観ているのでしょうか。もしまだなら、何とか探してこの本を読む前に観て下さい。映画の裏話が書かれていますので、観ていないとわからないから。1960 年代サリドマイドという化合物の入った睡眠薬を妊婦が服用した場合、胎児に深刻な影響を及ぼす事例が世界規模で報告され社会問題になりました。特に両腕が短い、時にはほとんどない状態で生まれることが多くサリドマイド児と呼ばれていたのを記憶しています。熊本に住む辻典子さんもその一人。懸命に生きる彼女の日常を本人が演じたこの映画は多くの青少年、あるいは大人たち、障害を抱えた子を持つ親たちに勇気を与えるものでした。私もちょっとした現状に不満を抱き愚痴を言ったりすることがあったのですが、典子さんの努力と前向きな姿勢に触れて大いに自分を恥じたことを覚えています。映画の色々なシーンは折に触れ思い出しています。映画を観ながら「うそお」と声に出たシーンがありました。ミシンの針に足で糸を通すシーンと釣り船から海に飛び込むシーンです。海に飛び込んで泳ぐシーンはエンディングの映像なのですが、誰もが息をのんだのではないですかね。海のシーンについては撮影の解説も本にあります。読んだらもっと驚きますよ。

この本では、映画の中の典子を私生活でも演じることから解放されたくて熊本市役所を辞め、名前も「のり子」と表記するようになり、結婚し子どもを育て、やがて封印していた講演活動を行う決心をするまでを綴っています。実は典子さん、私と同世代。一歳くらい違うのかな。ビールと焼き肉が大好きとのこと。ちょっと嬉しい。

ちなみに「障害」という字は三島由紀夫の『金閣寺』に使われていたので拝借しました。私、まぜ書きが嫌いなので。ああ、まぜ書きとは「拉致」を「ら致」など書くことです。嫌いやわ。

BGM は 松任谷由実 の Anniversary でした…。